

特別支援学校の保健体育学習指導案公開の現状について

発表者 國松 保乃加
指導教員 松坂 晃

キーワード：特別支援教育，学習指導案，保健体育

1. 緒言

障害のある子供たちが、生涯にわたり健康で豊かな生活を営む能力を身につけることはとても重要であり、それには学校での保健体育の授業が大きくかかわっていると考えられる。

これまで、特別支援学校での保健体育授業について、その実践例や研究会などの報告はされている(安井 2007, 下村ら 2008, 渡邊ら 2007)。しかし、特別支援学校の保健体育授業に関して、公開されている学習指導案は少なく、実際にどのような授業が展開されているのか、また、どのような支援方法や目標で行われているのかなどの資料は多くない。

そこで本研究では、特別支援学校の保健体育学習指導案の公開状況を調査するとともに、茨城県内の特別支援学校等を訪問し、保健体育学習指導案の収集と学習指導案の公開についてインタビュー調査を行い、それらの現状と課題を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

2-1 学習指導案の公開状況の調査

特別支援学校の保健体育学習指導案の公開状況と内容を調べるため、インターネットで各県の教育研修センターにアクセスし、①学習指導案のページがない、②特別支援学校の学習指導案がない、③特別支援学校の保健体育の学習指導案がない、④教育情報ネットワークなど県内教員に限定されている、⑤特別支援学校保健体育学習指導案が公開されている、の観点で分析した。

2-2 学習指導の分析

茨城県内の特別支援学校を訪問し、直近の1～2年の中で作成された学習指導案のうち公開可能な保健体育学習指導案を収集した。これらの指導案と上述した教育研修センターホームページ上で公開されている指導案をあわせて、保健体育学習内容を12の観点から分析した。

2-3 インタビュー調査

茨城県内の特別支援教育に携わる方々に面接調査を実施した。茨城県の教員、教育研修センター指導主事、特別支援教育課指導主事を対象とした。調査内容は、学習指導案が公開されない理由、中でも保健体育の学習指導案が少ない理由、運動量確保の工夫について、児童生徒の運動技能評価、評価にもとづく保健体育授業の改善について等である。これらの情報をもとに、KJ法を用いて分析を行った。

3. 結果と考察

3-1 学習指導案の公開状況

全国の教育研修センターにアクセスし、そこで参考資料として指導案が公開されているか調べた。その結果、教育情報ネットワーク内のみで公開している県が38%と最も多く、次いで学習指導案が

公開されていない県が36%で多かった。

普通学校の学習指導案が公開されているけれども、特別支援学校の指導案が公開されていない県が5%あり、特別支援学校の学習指導案が公開されているけれども体育の学習指導案がない県が8%であった。特別支援学校の保健体育の学習指導案が公開されている県は13%であった。これらのことから、特別支援学校だけでなく通常学級のものも含めて学習指導案は公開されにくいものだと分かった。

3-2 特別支援学校保健体育学習指導案の分析

茨城県内9校を訪問した際にいただいた指導案とインターネット検索をして出てきた指導案をまとめ12の観点から分析を行った。訪問で得た指導案47件、インターネットで調べた指導案32件となった。小学部が34校と一番多かった。

授業での生徒の分布は1～10人、11～20人、21～30人のグループがほぼ同じ割合だった。教員数は2～4人、5～9人が同じ割合で合計40%を占めている。10人以上での授業の割合は12%あり一番多い学校では28人だった。

主運動の内容はボール運動が全体の60%を占めており、体づくり運動、サーキット、器械運動がほぼ同じ割合になった。主運動の時間の分布は0～15分、16～20分、21～30分が多くみられた。60分という指導案もあったがその授業は二コマ続けて行われる授業だった。

児童・生徒の実態の明記、チームティーチングの役割の明記、全体目標の記載、個別目標の記載、個に応じた指導の明記はどれも記載されているものの方が多かった。

3-3 インタビュー調査からみた特別支援学校保健体育学習指導案について

茨城県内の特別支援学校等でのインタビュー調査から202のカードが作成され、27のサブカテゴリー、6のカテゴリーが抽出された。

(1) 体育学習指導案が少ない直接的要因

県内に小、中学校は約800校あるが特別支援学校は24校しかなく、特別支援学校教員の絶対数の少なさが根底にある。さらに、指導案作成機会の少なさが一因になっている。また、生活単元学習や課題学習に対する教員のニーズが高いなど、公開授業等での教科の偏りがある。さらに指導案収録システムがない県が多く、体育指導事例の不足がさらに研究授業への取り組みを難しくしている。

(2) 体育の専門性

特別支援学校では教員の体育の専門性が低い。これによって、運動種目特性の理解やボール運動の授業展開の難しさにつながる。また、ボール運動は変化を付けづらく、やりにくくなるので研究授業になりにくい、高等部に入るとゲーム中心の授業展開となり、実態差があるので公開しづらいなどの理由により公開授業として扱いにくいことが分かった。

(3) 個人情報の問題

特別支援学校の指導案には児童・生徒一人一人の実態表記があり個人情報が多く含まれているので公開しづらい、などの障害特性の記載が公開を難しくしている。また、校長の許可などの手続きを考えると、指導案の提供に躊躇してしまうなどの指導案公開への躊躇いがある。

(4) 体育授業実施の難しさ

体育は天候に左右される、場所の確保や雨天時のものも準備する必要がある、行事でつぶれることもある、など体育授業の不安定感が出てしまう。さらに学部やブロックで行うことが多いので生徒が多すぎてスペースが十分に取れないなどの運動施設の不足の問題がある。それにより、朝のランニングとの組み合わせにより体育授業の授業時間を確保している学校が多い。

体育には長期的観点をもった指導の難しさがある。学年によって単元が変わるので、運動技能評価を引き継ぐことはない。12年間を通じた全体計画が必要になるが、実際には、年間指導計画を作る中で段階的内容を書き込むようにしている。また、単元の評価を各学校で学年進行で引き継いでいるか不明であり、次年度のグルーピングは前年度の評価ではなく、前年度の能力別グルーピングを参考に行っていることが分かった。その原因の一つは体育学習評価の未装備である。他教科で段階表を作成することもあるが、体育では行っていない。体力テストの記録はあるが、運動技能評価はしていないことが分かった。個別の指導計画は作るが、どこまで詳しくやるかという問題があり、引き継がれていない問題があった。

(5) 集団で行う授業の難しさ

特別支援学校では児童生徒の実態差が大きく、個に応じた教育が求められ、それに関する研究授業が多いのに対し、個に応じた指導がテーマとなっているけれども、体育はやりにくい、などといった集団授業の難しさや、国語や算数は小グループで行うため指導案が多くなりやすい、など個に応じた指導の重視と集団授業の難しさがあげられた。また、体育授業での実態差を内包した授業展開の難しさもあげられた。学年が上がるほど実態差が広がり、研究授業として見せづらいことが原因で体育の公開授業がしにくいことが分かった。その一方で、障害の重い生徒でも、ボールの大きさなどの工夫で動けるかもしれないなど、実態差が出て体育に取り組める工夫をしていた。

集団で授業を行うと生徒の実態を記載する負担が増えていく。そうすると一人一人の特性を書くだけでも大変な作業になる。しかし、障害特性ぬきでは指導案の意味がないと考えていることが分かった。また、個別指導では生徒数が多いので指導案を作るのが大変であり本格的な指導案作成には時間がかかり毎回はできない。さらに集団で授業を行うときにチームティーチングの難しさも出てくる。能力別縦割りグループでは、学年を越えるまとめにくさがあり、体育はチームティーチングで行われるため話し合いの時間が必要となり、敬遠される、などの理由から体育授業振り返りの難しさが出てきてしまう。以上のことから習

熟度別に体育の時間を変えたり、同じチーム内の教員とアイデアを出し合う時間の確保が効率的に行われる必要があると考えた。

(6) 教員の熱心な取り組み

体育の授業では運動量も大切になるが動きの指導にとらわれて運動量がへった、ボール運動は運動量の確保が難しいなどの運動量確保の難しさがあることを認識し、説明や待ち時間を減らして練習量を確保するなど様々な手段によって運動量確保の工夫を行っている。

教員の熱心な取り組みは運動量の問題だけではなく、児童生徒への支援でも表れている。手を引くなどの支援は、どこをねらうかで支援が変わると考えており、ゲームを体験させるために手を引くことがあることや、理解できない時や模倣できない時には引く張る支援も必要であると考えている。しかし、生徒の主体性を尊重した指導と、生徒に寄り添うことが指導につながらないこともあることが分かった。これを解消するには、教師間で児童・生徒ごとの目標の確認ができていれば、過干渉になることがなく、児童生徒の目標にあった支援をすることができると考えられる。また、運動嫌いの子は卒業後スポーツにつながらないため、生徒が卒業後のスポーツに取り組むことができるように、授業づくりでは運動の楽しさを味わうことができるように配慮することや成功体験をさせることを重視している。重い子もできた、うれしい、自信になることが大切なので支援が必要であるとして、本質的な楽しさや自信を育む指導を重視していることがわかった。

4 まとめ

特別支援学校の保健体育学習指導案公開の現状について調べた結果、次のことが分かった。

- 1) 公開される学習指導案の不足は、教員数の少なさに加えて、個人情報の問題、体育の専門性の不足や、集団で行う授業の難しさなどが直接的な要因となっていた。
- 2) 体育授業の作成、展開が難しい中で教員の熱心な取り組みによって今日の特別支援教育の保健体育の授業があることが分かった。
- 3) 体育の授業改善のため、指導事例の収集と公開に力を入れる必要があると考えられた。

5. 文献

- 1) 安井友康(2007): 小中学校における障害のある児童生徒の体育授業に関する研究—北海道における実態調査から—, 北海道教育大学紀要, 58(1)
- 2) 下村雅昭・金山千広・山崎昌廣(2008): 中学校における生徒の体育授業に関する研究—近畿地区の実態調査から—, 京都女子大学生活福祉学科紀要, 4
- 3) 渡邊貴裕・丸井曜子・原田純二・小島啓治・国分充・奥住秀之(2006): 知的障害養護学校におけるボール運動の授業実践, 東京学芸大学紀要, 58, 507-514